

子育て支援

「健やか親子21全国大会」 シンポジウムより



福島富士子先生

ンタル面に影響を与える。この変化、影響について最近認識されつつあるが、また、**周囲の人は特に、お産が終われば、元の健康なからだに戻る**

と思っている人も多い。

そこで、産後ケアが必要と、**モデル的に世田谷区の産後ケアセンター**が始動した、助産師によるおっぱいケア、からだの回復を促す給食、子育て相談など、医療ではなく暮らしの中で、どのように子育てを始めていくかを丁寧に伝える。現在の日本の妊娠、出産は、高齢化、不妊治療の方、さまざまな疾患を持っていても妊娠出産できるようになった。医療からのケアも大事だが、生活レベルのケアで、本人の自己決定力を支え、ともに歩む支え手として、生活環境を整えることに重点を置く施設も大事と考える。利用者にとったアンケートでも、しっかり休養がとれた、助産師のおっぱいマッサージを受けながら受容される体験をした、などの声が聞かれた。また来所時にマンツーマンでケアをして信頼関係を作った後皆で一緒に食事をすると、母親同士少しずつ本音を話始める。産後ケアセンターは、地域につながるドアになることができるのではないか。

和光市の産前産後ケアセンターでは、世田谷区の評価を踏まえ、災害時に母子、女性の避難所になるよう、オムツやミルク缶を保存、市と提携して、**女性の福祉避難所**という機能も持っている。子育ての不安の解消、母親としての自覚、**地域の子育てグループ**との交流、**高齢者との世代間交流**も図り、**子どもと介護一緒に**の包括支援の取り組みを始めている。

人と人のつながりは母子保健から

今回の国の政策は、換言すると

1. 母子保健コーディネーターを、フィンランドのネウボラのように受け持ち制にして、保健師、助産師、ソーシャルワーカー等関係職種がチームで、切れ目なくサポートする。和光市の場合、民間で立ち上がり、そこへ市が委託し、母子健康手帳の交付までできる仕組みを作っている。こんにちには赤ちゃん事業も委託。
2. 産前・産後サポート事業。母子保健コーディネーターがケアプランを立て、NPO、地域、シニア世代の方をサポーターに巻き込んで妊娠期から子育て期にかかわっていただく。
3. 産後ケア事業。出産後、母子が地域に馴染み、暮らしを整え、社会に戻っていくための移行の場所になるところ。

国では、これら3つを合わせてモデル事業としていたが、母子保健コーディネーターは必須だが、上記2と3は**任意事業**となった。また自治体保健師からは、「今までと何が違う？」と聞かれる。すべての母を、切れ目なく担当へ、その仕組みをどうするか、改めて市町村で考えてほしい。

1980年に老人保健法ができ、予算は生活習慣病対策、高齢者対策に割かれ、母子にはほとんどつかなかったが、今般は5年間予算を付けることになっている。30年後の社会のために、この5年間母子にしっかりと取り組んでほしい。

第Ⅱ部 パネルディスカッション

地域における産後母子ケアの現状

みやした助産院院長 宮下美代子先生

横浜市では、「生まれる前から一貫した支援の充実」として、平成25年10月より産後母子ケアモデル事業(ショート・デイ)を市内8箇所の助産所に委託し実施している。利用者の負担は1



宮下美代子先生

割、ショート(宿泊)3,000円、デイ(日帰り)2,000円、いずれも7日間まで。妊娠届時に行う面談により、経済的支援の必要性の有無やDVのチェック、育児不安が強いなどの把握を行い、その後の支援に繋げている。当施設では、このうち産後母子ケア、産前・産後ヘルパー派遣事業(4か月まで)を市から委託を受け実施、ほか当院では、授乳・子育て相談(母乳外来)、育児サークル、当院分娩者には妊娠期から各健診、クラスなど1歳クラスまで継続して支援している。

産後母子ケアは、当院には助産師、栄養士、保育士、ヘルパー、アロマセラピストなど40名ほどのスタッフがおり、さらに院外提携として、産婦人科医、小児科医、行政、自助グループ、地域の方々と連携して母子を支援している。

利用の内訳では、デイ(日帰り)34%、ショート(宿泊)66%、入院時期は産後1か月未満が大半、うち2週間以内の入院が年々増加している。利用の理由では「支援者がいない」がもっとも多く、次いで、育児に対する不安、身体的な疲労・不眠となっており、これらは相互に作用し、相談できる、手を貸してくれる人がいないために不眠や疲労が重なり、不安も強くなっている人が多いものと考えられる。

授乳方法では、入院時は今混合栄養が66%、母乳のみが30%だが、問題点を整理すると、母乳が不足しているのではなく不安で人工栄養を足している人もおり、入院中のケアにより、退院時には42%が母乳のみとなっている。

妊娠中の情報伝達

産後の育児不安を軽減

当院でかかわる母親をみていると、妊娠中にさまざまな不安を抱えている人が多いが、医療機関

優勝後は、家族皆で息子のピアノ中心の生活を応援するようになった。

さまざまな体験が心を豊かに

息子はチャレンジ精神旺盛で、水泳、登山、乗馬、スキーなど何でも挑戦した。親としても、彼が音楽家として大成する前に、一人の人間として心豊かに育てほしい、何でも経験しないと素晴らしいさがわからないと考えていた。「辻井さんのピアノを聞いて心が豊かになった」という声を聞くたびに、いろいろな体験をして、感性豊かに育ったのが反映しているのではと考えている。

その後、中学生の時に会った指揮者の佐渡裕さんはじめ多くの人との出会いが、彼をさらに成長させた。世界的なコンクールでも優勝した。

人は、たくさん可能性を秘めて生まれてくるが、それを開花させる人は少ないと思う。可能性を信じてあげられるのは親だけ。人間の持っている可能性は無限にあると、息子に教えてもらった気がする。一つのことによって一生懸命頑張っていけば、夢は叶うと感じている。子育て中の方は、お子さんが、こんな風になりたいと言った時には、きっとできるから応援していくねと言葉をかけてほしい。親が一番の理解者、伴走者として支えてあげてほしい。子育てが終わった方は、いつでも遅くはない、自分の可能性深しをしてみたいか？

【シンポジウム】

切れ目のない妊娠・出産・子育て支援

第1部 基調講演 「産前産後ケアから

子育て世代包括支援へ～優しさが循環していく社会を目指して～」

東邦大学大学院看護学研究科教授

福島富士子 先生

平成26年度、厚生労働省は妊娠期からの切れ目のない子育て支援を目指し、「妊娠・出産包括支援モデル事業」を実施、市町村に「母子保健コーディネーター」を配置し、母子健康手帳の交付か

切れ目のない妊娠・出産・

ら妊婦とパートナーに対するアドバイスからスタートさせる。すべての妊婦に、妊娠初期から出産、退院後の生活を考慮したケアプランを立て支援の方向性を示し、妊娠中に母親グループを紹介し、セルフケアや産後の支援者について話し合う。情報提供はもちろんのこと、退院後の仲間づくりや悩み・不安の解消を図る機会とする。産後退院して子育てに悩まないよう、悩んだ時には自ら解決できるようにしておくことを目指す。

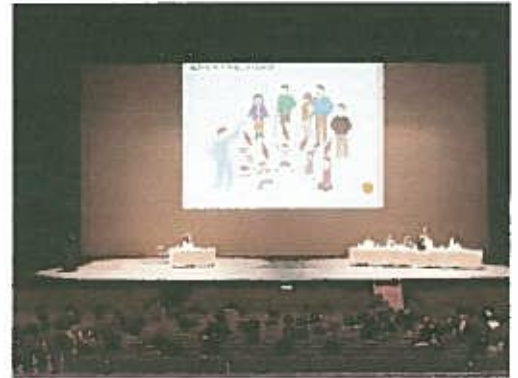
今年度からは、「子ども・子育て支援事業」の中の「利用者支援事業（母子保健型）」として、さらに「子育て世代包括支援センター」として本格実施されることとなり、全国自治体で取り組みが始まっている。

妊娠、出産を取り巻く社会の変遷

妊娠・出産は、1960年代以降、日本ではほとんどが医療機関で出産し、妊娠期の健診も医療機関。出産後、虐待の問題が出て来るなど児童福祉機関が担う。母子保健体制の充実、医療、福祉、また専門職だけでなくNPOや住民の方々加わることが求められている。

病院で出産し退院すると、日常生活が待っている。日本は医療先進国だが、生活レベルでのケアが不足しているのではないかと。産前・産後ケアでは、主に生活レベルでのケアの提供を行う。

昭和32年頃までは、地域社会の中、家庭で出産する人はまだ多かった。祖父母が同居して近所のつながりがあり、親戚も出入りし、お産は、助産師が家に来て、または助産所で出産する。その後昭和54年頃まではお産は医師がいる所ということになり、地域の中に産婦人科ができ始めると助産所は相次いで閉鎖。対策として国では、全国市町村に「母子健康センター」を設置。センター



シンポジウムでは先駆的事例の報告も行われた

には住み込みの助産師、嘱託医があり、市町村保健師とつながり地域で母子をみていた。ピーク時には700か所程度。以後保健センターとなり母子が抜けていった。現在では、病医院でのお産が99%となり行政とのつながりは少なくなった。このような背景の中で、これから地域と病院がどのように連携すればよいか。

入院期間の問題もある。平成8年の調査では、6日が37.3%、7日以上が33.9%（H25健やか親子21・山縣班調査）、H23年ではもっとも多いのが5日、4日で帰る母親も珍しくない。母乳や育児について未熟なまま退院、出産後の母親へのケアが薄くなっている。一方、産後の母がもっとも心配を募らせているのは退院から1か月後、2～3か月頃になると一旦落ち着き、1歳頃、育児の心配が増加してくる。

病院で出産し退院から1か月は、家族、実家にケアが任せられ、医療機関も、母は産婦人科で産後復古の状態を診、子どもは小児科で発育・発達を診る。産後1か月以内に新生児訪問を行っている割合は少なく、産後1か月間はケアが非常に薄い。

通常の生活への移行のために

母親のホルモンの変化でみると、妊娠すると女性ホルモンが高まり、お産で胎盤がはがれると一気に下がる。この急激な変化が母親のからだ、メ